

「サーカスのライオン」 あらすじと場面分け (じんぎの心情曲線)

「サーカスのライオン」 あらすじ

「サーカスのライオン」のあらすじ・作者（さくしゃ）・登場（とうじょう）人物（じんぶつ）をかくにんしよう。

作者について

「サーカスのライオン」は、川村たかしさんが かいのお話だよ。
川村たかしさんは、ほかに『山へ行く牛』というお話や『ゆきおんな』などの 日本民謡（みんよう）絵本なども かいしているよ。

登場人物（とうじょうじんぶつ）

【じんぎ】

このお話の主人公の、年を取っている サーカスのライオン。
一日中ねていたけれど、自分を好きだと言ってくれる 男の子と なかよくなって、やる気をとりにどしたよ。
男の子が 火事にあうと、火の中にとびこんで 男の子をたすけたよ。

【ライオンつかいのおじさん】

じんぎの火の輪くぐりで おちを鳴らす、ライオンつかいのおじさん。
じんぎの元気がない様子を見て、散歩（さんぽ）でもしておいで と、ていあんしたよ。



【男の子】

ライオンとサーカスが好きな、一人です番をしている男の子。

じんぎのところに 毎日やって来たよ。

火事に あったけれど、じんぎにたすけられたよ。

あらすじ

ちいちゃんのかげおくり

文：川村 たかし 絵：西村 達馬（たつま）

サーカスで火の輪くぐりの曲芸をする ライオンのじんぎは、年を取っていて 一日中ねてばかりいました。

毎日、同じことのくりかえして、やる気や生きる気力も うしなっていたのです。

ある夜、ライオンつかいのおじさんのていあんで、散歩をしていたじんぎは、ライオンとサーカスが好きな 男の子に会いました。

男の子は 次の日から毎日 じんぎのところへやってきて、チョコレートをわけてくれたり、入院中のお母さんの話をしたり しました。

じんぎは もうねむらないで 男の子をまつようになり、のり出してうなずきながら 男の子の話を聞きました。

サーカスがあしたで終わる日、男の子はお母さんがたい院すること、あしたサーカスを見にくることを じんぎにつたえました。

それを聞いたじんぎは、いつもは三つの火の輪を、わかいころのように 五つにしてくぐりぬけてやろうと 決心しました。

ところが、その夜ふけ、男の子のアパートで火事が起きました。

じんぎは アフリカの草原を走ったときのように、ひっしに男の子のアパートへむかい、



ぱっと火の中にとびこみ、男の子をだきかかえました。

表からもまどからも にげられないとはんだんしたじんざは、「ウォーツ」と力のかぎりほえました。

そして、その声で気づき、たすけにきた男の人に、やっとのことで 男の子をわたしました。

ほのおはアパートをつつみこみました。

人々の前に、ひとかたまりのほのおがまい上がり、ライオンの形になって、空を走り、消えさりました。

それは、ぴかぴかにかがやく、金色に光るじんざでした。

次の日のサーカスでは、五つの火の輪をくぐるじんざのすがたはありませんでしたが、おじさんは一人でむちを鳴らしました。

お客は、一生けんめいに手をたたきました。

「サーカスのライオン」内容とポイント

「サーカスのライオン」の 場面分けごとに、内容(ないよう)とポイントを かくにんしよう。場面は、「場所」や「登場人物」、「時間」などが かわったところをヒントにして 考えるといいよ。

主人公のじんざは、男の子と出会い、毎日会うなかで、気持ちが大きくかわっていくよ。

場面がかわっていく様子をとらえながら、登場人物のセリフや行動から、登場人物の気持ちや どんなふうに気持ちがかわっていったかを 考えてみよう。



第一の場面 年を取っていて やる気のないじんざ

第一の場面は、「町外れの広場に」から「四回とくりかえしていた。」まで。

【場所】町外れの広場のサーカス

【登場人物】じんざ・ライオンつかいのおじさん

【ないよう】ライオンのじんざは、年を取っていて、生きることや火の輪くぐりへのやる気もなかったよ。

町外れの広場に サーカスがやってきたよ。

見物人が ぞくぞくとやってくる様子や、「はい、いらっしゃい、いらっしゃい、オーラ、オーラ、お帰りはこちらです。」というかけごえから、にぎわっている様子がそうぞうで
きるね。

サーカスとは、動物やピエロなどが いろいろな曲芸をひろうするショーのことだよ。サーカスは、教科書といっしょにかかれていますように、大きなテントをはって、ショーをひらき、しばらくすると、また別の場所へ移動していくよ。

サーカスには、主人公の ライオンのじんざがいたよ。

じんざが どんなライオンかというと、年を取っていて、一日中ねむっているライオンだね。

ライオンといえば、動物の中でも強いイメージがあるけれど、お年よりのじんざは もう体力ややる気、生きる気力も おとろえているんだね。

じんざは、ねむっているとき、いつもアフリカのゆめを見たよ。

どんなゆめかというと、お父さんやお母さんや兄さんたちに会ったり、草原の中を 風のように走っているゆめだね。

「いつも」このゆめを見るということは、じんざがふだんから 家族やアフリカのことを強く思っていることがわかるね。



きっと「毎日一人でさみしい。家族に会いたい」「なつかしいアフリカに帰りたい」「せまいサーカスにとじこもって、同じわざをくりかえすのはあきた。のびのびと走りまわりたい」という気持ちで いっぱいだっただんじゃあないかな。

じんざの心の中は広い「草原の中」を思っているけれど、げん実はいつもせまい「はこの中」なんだね。

じんざは、自分の番が来ると、のそりと立ち上がったよ。「のそり」という行動から、年を取っていることもわかるし、やる気のない感じも つたわってくるね。

「自分の番」とは、じんざがサーカスのお客の前で 曲芸をひろうする出番のことだね。

じんざの曲芸は、火の輪くぐり、つまり、もえている円い火の輪をくぐりぬけるというものだよ。

じんざは、ライオンつかいのおじさんがむちを鳴らすと、火の輪をくぐったよ。けれども、おじさんがよそ見をしているのに、三回、四回とくり返したよ。

つまり、「火の輪なんてむずかしそうなのに、本当にできるのだろうか？」とドキドキしているお客に 見事に曲芸をひろうして、「すごい!」「かっこいい!」「すばらしい!」とこうふんしてもらうひつようがあるのに、大事な見せ場ではない場面でも、勝手にぐぐっているんだね。

「てきとうでいいや」「もうあきた」という、どうでもいい気持ちでいっぱいだったんではないかな。

第二の場面 じんざは ライオンが好きな男の子に出会う

第二の場面は、「夜になった。」から「じんざが下から手をふった。」まで。



【時間】夜

【場所】外

【登場人物】じんざ・らいおんつかいのおじさん・男の子

【ないよう】ライオンのじんざは、ライオンとサーカスが好きな男の子と 出会ったよ。

サーカスが終わった夜、ライオンつかいのおじさんは「たいくつかね。ねてばかりいるから、いつのまにか、おまえの目も白くにごってしまったよ。今日のジャンプなんて、元気がなかったぞ。」と言ったよ。

おじさんとじんざの かん係は、ただ「しじ」を出す相手と、「それにしたがう相手」ではなくて、ライオンつかいのおじさんは、じんざの気持ちをよくわかってくれたり、気にかけてくれたりする、友だちのようなかん係なんだね。

じんざは「毎日、同じことばかりやっているうちに、わしはおいぼれだよ。」と答えたよ。じんざは、おじさんのいうとおり、毎日同じことのくりかえしで、つまらないと感じているんだね。

「白くにごった目」ということから、じんざの年を取っている様子や、やるきがない様子がわかるね。

「わしはおいぼれだよ」というセリフには、「もう年をしまっ、わしはこのまま たいくつな気持ちで さいごをむかえるんだ」という、人生をあきらめているような気持ちも 感じられるね。

おじさんは、自分とかわってやるから、散歩でもしておいでとていあんしたよ。そこで じんざは人間の服を来て、人間のすがたになって、外へ出かけたんだね。

じんざは、うきうきして 外へ出たよ。

なぜかという、いつも サーカスのはこの中に とじこもって、ねてばかりいたから、外に出かけられることが うれしかったんだね。



すると、一人の男の子が じんざのことを サーカスのおじさんだと思いこんで「ライオンはねむったかしら。」「ちょっとだけ、そばに行きたいんだけどなあ。」と声をかけたよ。

この男の子は、ライオンとサーカスが好きな 男の子だったんだ。

「うん、大すき。それなのに、ぼくたち昼間サーカスを見たときは、何だかしよげていたの。だから、お見まいに来たんだよ。」という 男の子の言葉を聞いた じんざは、ぐぐつとむねのあたりがあつくなかったよ。

なぜかという、「自分のことをすきでいてくれる人がいるなんて、びっくりしたけれど、うれしい」「サーカスも見にきてくれていたんだ」「お見まいに来てくれるなんて、なんてやさしい子だ」と 温かい気持ちでいっぱいになったからだね。

おこづかいをためて、またサーカスに来るといふ男の子に、じんざは「ライオンもきつとよろこぶよ。」と言って、家まで送ることにしたね。

「ライオンもきつとよろこぶよ。」というの、ライオンつかいのおじさんになりきって言っているから こう言っただけで、じんざ自身が「男の子がまた見に来てくれるなんて、うれしい」と思っているということだね。

この男の子は、家で一人です番をしていたよ。

なぜかという、お父さんは、夜のつとめ(お仕事)があって、お母さんは入院していて、お姉さんも お母さんのつきそいのために、夕方から出かけていたからだね。

「ぼくはるす番だけど、もうなれちゃった」というセリフには、「本当は一人でさみしいな」という気持ちを なんだかかくしているみたいだね。

じんざは、男の子に サーカスのピエロが おどけて歩くまねをしてみせたよ。

なぜかという、「自分を好きと言ってくれる男の子に なにかしてあげたい」「自分と同じ ひとりぼっちの男の子を 楽しませたい」という 気持ちになったからじゃないかな。



ねてばかりいて、やる気のなかったじんざが、おどけたまねをするなんて、自分のことを好きだと言ってくれる男の子と出会ったことで、すこし明るい気持ちになっているね。

男の子がアパートに着くと、じんざはアパートを見上げていたよ。
すぐに帰らないで、しばらく男の子を見守っていたんだね。

男の子が まどから顔を出して話しかけると、じんざは下から手をふったよ。

家族に会いたいと いつもゆめを見ていたじんざにとって、一人です番をしている男の子のさみしさは、自分のことのように よくわかったんじゃないかな。
「少しでも男の子がさびしくないようにしたい」という じんざのやさしさや「男の子と会えてうれしい」という 明るい気持ちがつたわってくるね。

第三の場面 じんざは、火の輪を 五つにしてくぐろうと決心する

第三の場面は、「次の日」から「『火の輪を五つにしてくぐりぬけてやろう。』」まで。

【時間】次の日

【場所】ライオンのおりの前

【登場人物】じんざ・男の子

【ないよう】男の子は、毎日じんざに会いに来たよ。男の子がサーカスを見に来ると聞いたじんざは、火の輪を五つにしてくぐろうと決心したよ。

男の子が毎日会いに来る

次の日、男の子は じんざのところへやって来たよ。

ピエロのまねをしてくじいた 足くびはいたかったけれど、じんざはタオルをまいた足をそっとかくしたよ。



なぜかという、きのう話した相手が 本当はじんざだったと気づかれて 男の子にあやしまれたり、こんらんさせたりしなくなかったんじゃないかな。
よけいなしんぱいをかけずに、ライオンが好きで、会いに来てくれた男の子のやさしい気持ちを 受け止めたかったんだね。

男の子は、「ぼくと半分だよ。」と言って、じんざにチョコレートをくれたよ。
「ぼくと半分」ということは、きっと このチョコレートは男の子のおやつだよね。
大事なおやつを じんざにも わけてくれたんだね。

じんざは チョコレートが好きでなかったけれど、目を細くして 受け取ったよ。
なぜかという、うれしかったからだね。
「会いに来てくれてありがとう」「自分にやさしくしてくれる気持ちが うれしい。その気持ちをしっかり受け止めたい」という 気持ちだったんじゃないかな。
「目を細くして」という言葉や、教科書といっしょにかかっている絵からも、じんざのうれしさがつたわってくるね。

それから 男の子は 毎日やって来て、チョコレートをくれたり、お母さんの話をしたりしたよ。
じんざは、もうねむらないでまっていたよ。

第一の場面では、じんざは 一日中ねていたよね。
でも、男の子と出会ったことで、「男の子が毎日来てくれるのがたのしみだな」「せっかく来てくれた時に、ねていてがっかりさせたくないな」という気持ちになったから、ねむらなくなったんだね。

じんざは、のり出して、うなずきながら、男の子の話を聞いていたよ。
「のり出して」という様子から「男の子が来てくれてうれしい」「男の子の話を聞くのはわくわくする」という 気持ちが感じられるね。
「うなずきながら」という様子からは、「自分と同じひとりぼっちの男の子の話を聞いてあげたい」「自分にやさしくしてくれる男の子に、すこしでもよりそいたい」という 気持ちがつたわってくるね。



第一の場面でねてばかりいたじんざは、男の子が毎日来てくれるようになって、なんだかイキイキしてきたね。

じんざは 五つの火の輪くぐりをしようと 決心する

いよいよ、サーカスがあしたで終わるという日、男の子はいきをはずませてとびこんできたよ。

「いきをはずませて」ということは、とてもうれしい気持ちということだね。どんなことがうれしいかというと、「お母さんがたい院する」こと、「あしたサーカスに来る」ことの二つだね。

ひとりぼっちの男の子にとって、毎日じんざのところへ来たり、お母さんの話を聞いてもらったりしたことは、きっと心のささえになっていたよね。だから、うれしいこともほうこくしたくて、とんできたんだね。

「いよいよ、サーカスがあしたで終わるという日」ということは、サーカスはまた別の場所へ移動してしまうから、男の子とじんざが会える最後の日だね。

男の子が帰ると、じんざは ある決心をしたよ。それは「ようし、あした、わしはわかいときのように、火の輪を五つにしてくぐりぬけてやろう。」ということだね。

第一の場面で かかれている絵を見ると、火の輪は三つだったよね。今は三つで、わかいときは五つだったということは、年を取ったじんざにとって 五つの火の輪をくぐることは おずかしいはずだね。

それなのになぜ じんざは 五つの火の輪くぐりに ちょうせんすることにしたのかな。



それは「自分を好きと言ってくれる 男の子の気持ちにこたえて、かっこいいところを見せて、よろこんでもらいたい」「自分にやさしくしてくれて、毎日楽しませてくれた男の子に、さいごにかっこいいパフォーマンスを見せて、おん返しをしたい」という 気持ちになったからだね。

「体に力がこもった」という様子からも、じんざがぐっとやる気を出していることがわかるね。

「目がぴかっと光った」という様子は、やる気がわいている目ということだね。第二の場面の「白くにごった目」は、きぼうもやる気もうしなっている感じがするけれど、第三の場面では、めらめらとやる気にもえていて、イキイキとした目になっているんだね。

男の子と出会い、毎日会いに来てくれる中で、じんざにとって男の子は、だんだんと大切なそんざいになり、生きる楽しみを感じさせてくれたり、心のささえになったりしていったんだね。

そして、男の子のおかげで、サーカスのライオンとしてのほこりや自信、曲芸をがんばりたい気持ちを、もう一度思い出すことができたんだね。

男の子と毎日会っていく中で じんざの気持ちが 大きくかわったね!

第四の場面 じんざは 火事から男の子をたすける

第四の場面は、「その夜ふけ……。」から「たちまち暗やみの中に消えさった。」まで。

【時間】(サーカスがあしたで終わるという日)の夜ふけ

【場所】男の子のアパート

【登場人物】じんざ・男の子・人々

【ないよう】じんざは 火事の中から 男の子をたすけたよ。じんざは 金色に光るライオンになって、空を走り、消えさったよ。



いよいよ、サーカスがあしたで終わるという日の夜ふけ、火事が起きたよ。
それは、なんと男の子のアパートのあたりだったんだ。

男の子のアパートのあたりが もえているのを見た じんざの体は、ぐうんと大きくなったよ。

「ぐうんと大きくなった」ということは、年を取ったおいぼれのライオンではなくて、草原で生きる本物のライオンのように、毛をさか立てて、りっぱに立ち上がったということじゃないかな。

いつもはのそりと立ち上がっていたじんざが、ぐうんと大きくなったなんて、本物のライオンらしい、いさましさや強さを 感じるね。

じんざは、アフリカの草原を走ったときのように、ひとかたまりの風になって、男の子のアパートにすっとなでいったよ。

「おりをぶちこわして」「まっしぐらに」「足のいたいのもわすれて」という行動から、とにかくひっして、男の子のアパートに いそいでいったことがわかるね。

なぜかという、とにかく「男の子がしんぱい」「ぶじだろうか」という気持ちだったんだね。

「アフリカの草原を走ったときのように」ということは、じんざが本物のライオンのかんかくや、ライオンの強さ、いさましさを とりもどしているということじゃないかな。

「ひとかたまりの風」は、なんだか重みのある風という感じがするね。

じんざが 本物のライオンらしく走るスピードの速さや 体の大きさを表しているんじゃないかな。

アパートに着き、「中に子どもがいるぞ。」「中へ、もう入れやしない。」という声を聞いたじんざは、ぱっと火の中にとびこんだよ。

なぜかという、男の子がぶじではないと知り、「自分にやさしくしてくれて、生きる楽しさをくれた男の子を 何としてもたすけたい!」という気持ちで、とにかくひっしだったからだね。



「だれだ、あぶない。引き返せ。」という声を聞いたじんざは、「なあに。わしは火には、なれていますのじゃ。」とひとりでつぶやいたよ。

じんざは 火の輪くぐりをしているから、たしかに火にはなれているかもしれないけれど、火の輪くぐりの火と 火事の火は同じかな？

火の輪くぐりの火は、輪の部分だけでもえるように、ちょうせいされているから、火が大きくなったり、じんざにもえうつったりすることは ないよね。

でも、火事の火は、まわりにどんどんもえうつって、大きく広がっていくし、けむりで息もくるしくなったりする、きけんなものだよね。

「ごうごうとふき上げる ほのおは かいだんをはい上り」「けむりはこの部屋からうずまいて」という様子からも、火事のおそろしさがわかるね。

だから 火事の中にとびこんでいくのは、たとえライオンといういさましい動物でも、きけんだし、かんたんなことではなかったはずだよね。

それでも「火になれていますのじゃ」と言ったのは、自分にそう言い聞かせることで、「火事にとびこむのはこわくない」「男の子をたすけるぞ」と 自分を なっとくさせようとしたからじゃないかな。

じんざは足をひきずりながら、男の子の部屋まで たどり着いたよ。

「たどり着いた」という様子から、大きなほのおの中を、くじいた足もいたむのに、やっとこのことで すすんでいったことがわかるね。

じんざは、男の子をだきかかえて、外へ出ようとしたけれど、表はもう、ほのおがぬうっと立ちふさがっていたよ。

つまり、じんざが入って来た入口は火がいっぱいになっていて、そこから出ていくことは できないじょうきょうだったんだね。

つぎに、じんざはまどから首を出したけれど、身ぶるいしたよ。

なぜかという、高く、ライオンでもとびおることができなかつたからだね。



入り口からも出られず、まどからも出られないということは、男の子もじんざも にげみちがまったくない、とてもピンチなじょうきょうだよね。

そこで、じんざは「ウォーツ」と力のかぎりほえたよ。

この「ウォーツ」は、人間の言葉にすると、「男の子はここだ!たすけてくれ!」という意味だね。

男の子をつれて にげ出すことができないと はんだんしたじんざは、「自分はどうなってもいいから、ぜったいに男の子だけでもたすけよう」というかくごを決めて、アパートの外にいる人に 全力でつたえたんだね。

「ウォーツ」という心のそこからのほえ声から、「せっかくお母さんがたい院するのに、ここで死なせるわけにはいかない」「自分にやさしくしてくれ、生きるよろこびを もたらしてくれた男の子を ぜったいに守りたい」という じんざの強い思いが そうぞうでできるね。

すると、消ぼう車が下にやってきて、じんざは 男の人に男の子をわたすことができたよ。

でもすぐにじんざは りょう手で目をおさえたよ。

なぜかという、けむりのために、もう何も見えないからだね。

「やっとのことで」という言葉から、男の子をだきかかえているときから、けむりが目にしみて、いたくて、目をあけていられないじょうきょうだったけれど、それでも ひっしてがまんしていたことが そうぞうでできるね。

男の子をぶじにひきわたせたから、じんざは がまんのげんかいたった目をおさえたんだね。

風にのったほのおは 真っ赤にアパートをつつみこんで、火の粉をふき上げていたよ。火事がもっとひどくなって、アパート全体が火につつまれてしまったことがわかるね。

ライオンのすがたはどこにもなかったよ。

つまり、じんざは、そのまま ほのおに つつまれてしまったんだね。



やがて、人々の前に ひとかたまりのほのおが まい上がったよ。
ほのおは、みるみるライオンのかげになって、空高くかけ上がったよ。

このほのおは、ぴかぴかにかがやくじんざだったよ。
さっきまでのすすけた色ではなく、金色に光るライオンは、空を走り、たちまち暗やみ
の中に消えさったよ。

つまり、じんざは 天国へ帰って行ってしまったんだね。

でも、どうして最後をむかえるとき、じんざは「ぴかぴかにかがやく」「金色に光るライ
オン」になったのかな。

金色は、勝ちやえいゆう、かがやき、ゆたかさ、美しさなどの とくべつなイメージがあ
るよね。

じんざが金色に光っていたのは、きっと 男の子のために勇気や全力を出し、男の子
の命をすくった じんざのいさましさをすばらしさを 表しているんじゃないかな。
そして「男の子をたすけることができて本当によかった」という、じんざのまんぞくした
気持ちや幸せな気持ちも、ぴかぴかかがやくすがたとして、表れているんじゃないか
な。

お話を読んでいる わたしたちにとって、じんざの死はとても悲しいけれど、じんざの
死は けっしてただ悲しいものではなかったんだね。
じんざは 男の子をたすけることができたよろこびと ともに、天国へのぼっていったん
だね。



第五の場面 ライオンつかいのおじさんとお客が じんざをたたえる

第五の場面は、「次の日は」から「みんなが知っていたので。」まで。

【時間】次の日

【場所】サーカス

【登場人物】ライオンつかいのおじさん

【ないよう】ライオンのおじさんは、火の輪を五つにして 一人でおちを鳴らしたよ。お客は一生けんめいに手をたたいたよ。

次の日のサーカスでは、ライオンの曲芸は さびしかったよ。

なぜかという、じんざはいなくて、おじさんが一人でおちを鳴らしていたからだね。

おじさんが 一人でおちを鳴らす様子をそうぞうすると、じんざがない悲しみやさみしさがよりいっそう つたわってくるね。

じんざのそんざいは大きかったんだなということも、ひしひと つたわってくるね。

なぜじんざはないのに、おじさんは ライオンの曲芸を ひろうしたのかな。

それはきっと「じんざといっしょに、サーカスができてとてもしあわせだったよ」「いつまでも、おじさんの心の中にじんざはいるよ」「男の子をすくったじんざをほこりに思うよ」という気持ちだったから、さいごの日も ライオンの曲芸を やりきったんじゃないかな。

第一の場面では、三つだった火の輪が、最後の場面では 五つになっているよね。

きっと じんざがおじさんに「明日は男の子のために、火の輪を五つにしたい」と そうだんしていたんじゃないかな。

じんざがいなくなっても、ちゃんと火の輪を五つ用意したところに、「五つの火の輪をくぐろうと決心した じんざのねがいをかなえてやりたい」「じんざは本当にりっぱなライオンだった」という おじさんのじんざへの思いを感じるね。



お客は 一生けんめいに手をたたいたよ。

なぜかという、じんざがどうして帰ってこなかったかを、みんなが知っていたからだね。

つまり じんざが男の子をたすけるために 火事にとびこんで、命を落としたということ
を 町中が知っていたんだね。

そして じんざのすがたは見えなくても、「じんざのことをわすれないよ」「男の子をた
すけてくれてありがとう」「りっぱなライオンだったよ」という気持ちで、じんざのゆうか
んさやすばらしさを 心からたたえていたんだね。

このように、みんなの心の中にじんざがいるから、じんざがいなくなってしまうても、お
じさんにも お客にも じんざが いさましく イキイキと 火の輪をくぐるすがたが 目に
うかんでいたんじゃないかな。

このお話で じんざは 自分を好きだと言ってくれて、毎日会いに来てくれる男の子の
おかげで、たいくつだった毎日が楽しくなり、だんだんと やる気や自信を とりもどし
ていったよね。

そして、大切なそんざいとなった男の子が きけんな目にあうと、全力で男の子を守り
ぬいたね。

きっと 作者は このお話をとおして わたしたちに、人は一人で生きていると 気力や
やる気をうしなってしまうけれど、だれかが まっすぐに向き合ってくれたり、好きだと
思ってくれたりすることで、明るい気持ちになれたり、やるきがわいたりしたりする と
いうことを つたえたかったんじゃないかな。

そして、たいせつな人を守ったり、人のために全力をつくしたりすることの 強さやすば
らしさ、美しさも 知ってほしかったんじゃないかな。



「サーカスのライオン」中心人物の行動や様子

「サーカスのライオン」に出てくる中心人物の、場面ごとの行動や様子から、どんな気持ちだったのかを想ぞうしてまとめてみよう。

表の中にまとめてある【気持ち】は、「これがぜったいにたっさい」というものではないので、ぜひ みんなもじぶんでかんがえてみよう。

| 場面 | サーカスのおじさん | じんざ | 男の子 |
|----|--|--|---|
| 一 | <p>【行動や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「さあ、始めるよ。」 ・むちを鳴らす <p>【気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さあ、たくさんのお客さんに喜んでもらうぞ。 | <p>【行動や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年取っていた ・一日中ねむっていた ・いつもアフリカのゆめを見た ・のそりと立ち上がる ・おじさんがよそ見しているのに、三回、四回とくり返していた <p>【気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つかれたな ・たいくつだな ・アフリカの草原で走りたいな ・家族に会いたいな ・めんどうくさいな | |
| 二 | <p>【行動や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「たいくつかね。」 ・「おまえの目も白くにごってしまったよ。」 ・「元気がなかったぞ。」 ・「だろうなあ。」 ・「散歩でもしておいでよ。」 <p>【気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・じんざがかわいそうだな。 ・じんざがしんぱいだな。 ・元気を出してほしいな。 | <p>【行動や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「毎日、同じことばかりやっていたうちに」 ・「わしはおいぼれたよ。」 ・「うきうきして外へ出た。」 ・「外はいいなあ。」 ・おどろいて、もぐもぐたずねた。 ・ぐぐっとむねのあたりがあつくなった。 | <p>【行動や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ちょっとだけ、そばへ行きたいんだけどなあ。」 ・「お見まいに来たんだよ。」 <p>【気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ライオンがしんぱいだな。 ・ライオンに元気になってほしいな。 |



| | | | |
|---|--|---|---|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・ひよこひよこことおどけて歩いているとき ・じんざが見上げていると、部屋に灯がともった。 【気持ち】 ・たいくつだな。 ・もうつかれたな。 ・外へ出られるなんて、うれしいな。 ・ぼくのことを好きな男の子がいるなんて! ・男の子の気持ちがうれしいな。 ・男の子がさみしくないように、楽しませてあげたいな。 ・男の子はだいじょうぶかな? | |
| 三 | | <ul style="list-style-type: none"> 【行動や様子】 ・目を細くして受け取った ・ねむらないでまっていた ・のり出して、うなずいて聞いていた ・体に力がこもった ・目がぴかっと光った 【気持ち】 ・男の子の気持ちがうれしいな。 ・男の子が来るのが楽しみだな。 ・男の子の話をちゃんと聞いてあげたいな。 ・男の子を、きよく芸で楽しませてあげたいな。 ・元気になったよ、とあんしんさせてあげたいな。 | <ul style="list-style-type: none"> 【行動や様子】 ・「ぼくと半分こだよ。」 ・毎日やってきた ・いきをはずませてとんできた 【気持ち】 ・ライオンが元気になるといいな。 ・お母さんがたい院するのが、うれしいな。 ・サーカスに来れるのがうれしいな。 |
| 四 | | <ul style="list-style-type: none"> 【行動と様子】 ・はね起きた ・体がぐうんと大きくなった ・おりをぶちこわして、まっしぐらに外へ走り出た ・すっとなでいく ・ぱっと火の中へとびこんだ | |



| | | | |
|----------|---|--|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・思わず身ぶるいした ・力のかぎりほえた ・りょう手で目をおさえた <p>【気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・男の子が心配だな ・男の子をぜったいにたすけな きゃ! ・どうしよう、飛びおりられない ぞ。 ・どうか、男の子だけでも たすけてくれ! ・男の子がたすかってよかった。 でも、わしはもうだめかもしれ ない。 | |
| <p>五</p> | <p>【行動や様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人で、チタッとむちを鳴らした <p>【気持ち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・じんざがいなくなってしまっ て、とてもさみしいな。 ・じんざはここにはいないけれ ど、じんざがまるでいるように 思うよ。 ・じんざのすごいところや、気 持ちを、お客さんにわかって ほしいな。 | | |



「サーカスのライオン」表現の工夫

くりかえすことば

「サーカスのライオン」では、音や人物の行動、様子をあらわすのに、くりかえすことばが使われているよ。

くりかえすことばを使うことで、文章にリズムをもたせたり、読む人のいんしょうに残るようにするようかがあるよ。

「サーカスのライオン」でつかわれている「くりかえしことば」

- ・見物人が「ぞくぞく」と
- ・テントが「ハタハタ」と鳴って
- ・耳を「ひくひく」させながら
- ・丸い輪が「めらめら」ともえていた
- ・じんざは「うきうき」して外へ出た
- ・星が「ちくちく」ゆれて
- ・じんざはおどろいて、「もぐもぐ」たずねた
- ・「ひよこひよこ」とおどけて歩いているとき
- ・足首は「ずきんずきん」といたかった
- ・人々が「わいわい」言いながら
- ・「ごうごう」とふき上げるほのお
- ・「ぴかぴか」にかがやくじんざだった

ちなみに、この「くりかえすことば」は「畳語(じょうご)」というよ。



たとえが使われている

「サーカスのライオン」では、「〇〇は△△のように」とか、「まるで〇〇のように」とか、「〇〇は△△になって」というように、何かをほかのものに「たとえる」あらわしかたのくふうがつかわれているよ。

ただ「はやく走った」とあらわすよりも、「〇〇のように走った」と、たとえるほうが、より読む人がイメージしやすいし、いんしょうにのこるよね。

「サーカスのライオン」で「たとえ」がつかわれているところ

- ・サーカス小屋は、まるで海の上を走るほかけ船のようだった。
- ・草原の中を、じんざは風のように走っていた。
- ・じんざはひとかたまりの風になってすっとんでいく。

「たとえ」がつかわれているかどうかは、「まるで」とか「~のように」ということばがよくつかわれているので、目じるしになるよ。

※これらのことばをつかわないばあいもあるよ。

ちなみに、このように「たとえる」あらわしかたのくふうを、「比喩(ひゆ)」というよ。



「サーカスのライオン」ことばの意味

「サーカスのライオン」で つかわれている ことばの 意味を しょうかいするよ。
 「サーカスのライオン」の 中で つかわれている 意味なので、ちゅういしよう。

| | |
|--------|--|
| ことば | いみ |
| 町外れ | 町の外がわのば所のこと。 |
| 火の輪 | 輪っかに火をつけたもの。サーカスなどでは、その輪っかの中をくぐりぬけたりする。 |
| 見物人 | サーカスやイベントや、何かのできごとなどを見に来たひとびとのこと。 |
| ぞくぞく | つぎからつぎへと つづくようす。 |
| はらむ | 中にふくめて持つこと。 |
| ほかけ船 | 「ほ」とは、船がすすむために風をうけとめるための布のこと。「ほ」で風をうけてすすむ船を、「ほかけ船」という。 |
| のそり | のろのろとうごくようす。 |
| 持ちこむ | ものを持って中にいれること。 |
| こうし戸 | 「こうし」とは、木や鉄ぼうなどを、たてとよこに組んだもの。「こうし」の形になっているとびらのこと。 |
| ぶ台 | ステージ。げきや、わざを見せるために、まわりよりも高くなっているば所のこと。 |
| めらめら | ほのおが大きくゆれうごくようす。あつくもえるようす。 |
| むち | 馬や牛を走らせたりすすませたり、どうぶつに言うことをきかせる時につかう長いぼう。 |
| よそ見 | ほかのほうこうや ば所を見ていること |
| しんとする | しずかで何も音がしないようす。 |
| ときおり | 少しのあいだをあけて、ときどき何かが起こるようす。 |
| 音を立てる | 音をだすこと。 |
| たいくつ | つまらないこと。何もすることがなくてあきてしまうこと。 |
| 白くにごる | 「にごる」とは、ほかのものがまじること。黒い目の中に、白色がまじってにごっているようす。 |
| おいぼれる | 年をとって、からだが思うように動かなかったり、心のうごきがにぶくなること。 |
| うきうきする | うれしくて、楽しい気持ちになること。 |
| ひとり言 | 聞くあいてがいない中、じぶんだけでもものを言うこと。 |
| しょげる | がっかりして、げん気がないようす。落ちこんでいるようす。 |
| お見まい | びょうきやけがをした人に あいに行くこと。 |



| | |
|----------|---|
| ことば | いみ |
| むねがあつくなる | かんどうしたり、こうふんするようす。 |
| 手を引く | 手をつないで あいてをつれて行くこと。 |
| 夜のつとめ | 夜にするしごとなどのこと。 |
| おどける | 人をわらわせるために、おもしろいしぐさや ことばを言うこと。 |
| くじく | むりな力がかかって、かんせつ(手や足の、まがるどころ)などをいためること。 |
| 首をかしげる | ふしぎそうに首をかたむけること。 |
| 灯がともる | でんきや、ランプなどが つくこと。 |
| ゆうべ | きのうの夜のこと。ゆうがたから夜中までの時間。 |
| さし出す | 手をのばしてあいてのほうに物をわたすこと。 |
| のり出す | 体を前や外に出るようにすること。何かにきょうみがあって、そちらに気持ちがむいているようす。 |
| うなづく | 頭を上下にふって、「さんせい」や「わかった」という気持ちをあらわす どうき。 |
| いよいよ | とうとう・ついに。 |
| いきをはずませる | うんどうしたり、こうふんして、はげしくいきをするようす。 |
| もうじき | もうすぐ。 |
| 力がこもる | 力がこめられていて、強そうなようす。 |
| 夜ふけ | 夜がふかくなって、夜中にちかづいている時間。 |
| だしぬけ | とつぜん・きゅうに始まること。 |
| どなる | 大声でさけぶこと。 |
| うとうとする | ねむ気がおそってきて、ちょっとねむりはじめること。 |
| はね起きる | とつぜんおどろいて、とび起きること。 |
| 風にひるがえる | ぬのなどが風をうけて、うごいているようす。 |
| まっすぐら | まっすぐすすむこと。しんけんにするようす。 |
| なれる | なんどもけいけんしたり、長いことやっていたことで、何もかんじなくなること。 |
| ふき上げる | くうきや風が、持ち上げてふきとばすこと。 |
| うずまく | うごきまわって、まわりをまきこむこと。 |
| たどり着く | もくてきの所にとちやくすること。 |
| 気をうしなう | ショックなことがあったり、しげきをうけたりして、のうの血の流れがわるくなることで「いしき(起きているじょうたい)」がなくなること。 |
| すばやく | 早くするようす。 |
| だきかかえる | だきしめる・しっかりとだくこと。 |



| | |
|--------------|---|
| ことば | いみ |
| 立ちふさが る | 道やおり道に立って、とおることをじゃますること。 |
| 身ぶるい | 体がふるえること。 |
| 力のかぎり | じぶんの力や、できることのげんかまで。 |
| はしごをか ける | 高いところにのぼるために はしごをおくこと。 |
| やっとのこと | 何かをするのに、大変なことがあったり時間がかかって、ついにそれができること。 |
| 声をかぎり によぶ | じぶんがそのとき出せるめいっばいの大声でさけぶこと。 |
| 風にのる | 風をつかっていどうすること。風をうけてすすむこと。 |
| やがて | そのうち。 |
| まい上がる | 上にのぼりあがること。 |
| みるみる | とても早く、みじかい時間でなにかが変わっていくようす。 |
| すすけた色 | 「すすける」とは、ぜんたいが黒くよごれているようす。ふるいかんじのする、くすんだ色のこと。 |
| たちまち | あっというまに。 |
| 曲芸 | すぐれた体の力や、ぎじゅつをつかって芸をすること。 |
| むちを鳴ら す | むちをつかって音を出すこと。 |
| くぐりぬける | すきまや、とおるのがむずかしいところを とおりぬけること。 |

